

「縁・えにし」のよろこび

～真教寺・秋の彼岸会～

先般、9月13日～15日の3日間（4席）で『真教寺・秋の彼岸会』をお勤めしました。

彼岸とは、お念仏（南無阿弥陀仏）の教えをいただいたものが、いのちを終えて生まれていくさとりの世界、西方浄土のことです。阿弥陀さまは、「必ず救う、われにまかせよ」と西の岸より『南無阿弥陀仏』となって、今この私に届いているのです。

彼岸会は、阿弥陀さまに抱かれて、先に浄土へ生まれた方々をたずねながら、このいのちが彼岸へと続くただ一つの道、お念仏の道を歩ませていただくことをよろこばせていただく仏縁であります。

ご講師に、山内教圓師（佐賀県基山町・光連寺）をお迎えして、お彼岸のおこころを頂戴しました。彼岸入り前の日程でしたが、たくさんの方々にお参りしていただきました。



講師：山内 教圓師

秋の仏教婦人会法座

先般、10月22日（月）に秋の法座をお勤めいたしました。お斎の後・おつとめ・ご法話（筑紫野市・願応寺・中川清昭師）をいただきました。年間に2回の法座があります。那珂川町には、参り合いという習慣があり、当日は他の7ヶ寺の婦人会会員様もお参りされました。



講師：中川清昭師



各地区役員が作って頂きました

【真教寺仏教婦人会活動】

「仏教婦人会綱領(下記参照)」の基本に、年2回の法座、初参式のお手伝い、お斎準備、境内清掃奉仕、街頭募金、研修会参加、女性の会への参加などを行っています。



現)婦人会三役
小森(健)さん・白水さん・小森(恵)さん



各地区役員

【仏教婦人会綱領】

(浄土真宗本願寺派仏教婦人会連盟)

私たち仏教婦人は、真実を求めて生きぬかれた親鸞聖人のみあとをしたがい、人間に生まれた尊さにめざめ、深く如来の本願を聞きひらき、み法の母として念仏生活にいそしみます。

- 一、ひたすら聞法につとめ、慈光に照らされた日々をおくります。
- 一、念仏にかおる家庭をきずき、仏の子どもを育てます。
- 一、「世界はみな同朋」の教えにしたがい、み法の友の輪をひろげます。

次回号は「女性の会」を詳しくご紹介！

阿弥陀さまからのお手紙

『サルが人間に!』

福岡・海徳寺住職 松月 博宣
心に響いたブログ記事

東京の築地本願寺のホームページに、ご輪番のブログ（日記）があり、その中に「こたえられない質問」と題した次の記事がありました。

「今、大学生の息子が保育園児だった時のエピソードです。家族で夕食を食べていると息子が言いました。」

「人間の先祖はサルだったんだよね？」

私の父が言いました。

「ほう、よく知っているね。ひろしくんは賢いね」と息子が、

「じゃあ、おばあさまのお母さんは、サルなん？」

私の母は怒って言いました。

「何をいうの！私の母はまだ元気！サルじゃない、人間よ！」

他のみんなは大笑いです。息子は続けてたずねました。

「おばあさまのお母さんは人間なのか。じゃあ、いつサルが人間になったの？」

大笑いしていたお寺の家族一同でしたが、あとは黙々と箸を運ぶだけ…」

私は最後の「じゃあ、いつサルが人間になったの？」という言葉が心に響きました。

これは単なる進化論の話ではないですね。私は、この問いに対して「それは、阿弥陀さまの前に座ることが出来るようになった時が、サルが人間になれるときじゃないか？」と言ってみた

いのです。

ひとの目を映すカガミ

阿弥陀さまの前に座るといふことは、ごまかしのない真実なるもの、永遠なるものの前に身を浸すということにほかなりません。それは生きることの意味と、自分とは一体何者であるのか？ということが問題になるといふことです。

浅田正作さんの詩です。

毎朝毎朝

洗面台の鏡に向かって

私は自分のなを

見ていたのだろう

この詩のように、私たちは毎朝、鏡の前に立つのを忘れることはありません。しかし、一体何を

見ているのでしょうか？

鏡は自分を見るものだと思っかけていますが、髪が乱れてはいないか、お化粧はきちんと出来ているか、服装の乱れはないか…と、自分の外見を点検することで他人さまに恥ずかしくない自分を取り繕うためであるとするなら、鏡は自分自身ではなく「他人さまの目をみている」ことになると思

います。

阿弥陀さまの前に座るといふことは、その鏡に映らない私を見させてもらえる場を持つことに他なりません。その時「サルが人間になれる」に

違いないのです。

他人の目はごまかせます。しかしごまかしの効かない阿弥陀さまの前に座る時、自分の姿を思い

知らされます。私が死ねばあなたは楽に

義父を介護されながらお寺にお参りし、ご法話を聴くご縁を重ねているご婦人がいらつしやいます。

「義父が介護する私に、泣きながら『すまん』あ、わしが早く死ねば、あんた楽になるのになあ』というのです。

その時、『何を言うのです！そんな悲しいことは言わないでください！』と、私も泣きながらお義父さんを叱りました。しかしそう言いながら、私のこころの底に冷たいものがよぎりました。

『そうだったらどんなに楽か…』

それに気づかされた時、私が恥ずかしくて」と述べられたのです。

この方は他人さまの目には決して恥ずかしくない、立派に介護をされる素晴らしい方です。しかし、ご婦人をして「私が恥ずかしい」と言わしめる背景には、ごまかしのない真実の阿弥陀さまの前に座る生活があるのです。それはそのまま、恥ずかしい私を、悲しみ抱きしめてくださる阿弥陀さまの温もりの真つただ中でもありました。

うぬぼれることが出来るものは一つも持ち合わせていないお粗末なままに阿弥陀さまに抱かれて、という大きな安心感の中で、お粗末であるからこそ、せめてこれくらいのことばさせてもらいましよう、今日を生きている時こそ、サルが人間になれるその時であり、同時に仏になることの出来る身の誕生でもあると思うのです。

※この法話を書かれた松月博宣氏が、この度の真教寺報恩講（十一月二十一～二十三日）ご講師です。